

東大現代文 ハンドアウト

— 第 3 回 (2012 年度 第 1 問) —

氏名：_____

ハンドアウト

(1) 1～9段落

- 1** l.7 「近代科学が、自然を使用するにあたって強力な推進力を私たちに与えてきたことは間違いない」と言えるのはなぜか。

Ans. 2つある。8～9行目の「だけではない…それだけではなく」に着目。ここから、(1) テクノロジーの進歩と、(2) 近代的自然観そのものの2つが理由となっていることが分かる。

では、(2) の自然観そのものから、自然を利用してよいということが出てくるのはなぜか。例えば「自然は神が人間のために作った」という考えからすると、「自然は人間の好きなように利用してよい」ということがでてくる。それと同じように、14行目の「機械論的自然観」と16行目の「原子論的な還元主義」と18行目の「物心二元論」という3つのエレメントから、自然を積極的に利用してよい、ということが導出されると、本文では説明されている。2003を参考にせよ。

- 2** l.14 機械論的自然観とは何か。



- 3** l.16 原子論的な還元主義とは何か。



《設問一》

1 問一のタイプは？

Ans. 後。28行目の「これが二元論的な認識論である」の「これ」に着目。

そして問題文をチェック！！「趣旨に従って」という指示は、単なる辞書的な意味、哲学的な意味ではなく、この文での意味を解説せよ、ということ。単なる知識問題ではない。

2 構文

Ans. 「二元論」のニュアンスは、2つの概念が対比されていること。これを踏まえて、傍線部の意味の概略を押さえよう。

③ 分析

Ans. 「物」, 「心」, 「二元論」

④ 「二元論」

Ans. まず「二元論」のニュアンスを押さえて、答案の大枠を決定したい。

そこで、26 行目の「こうして」に着目しよう。その後にまとめの文が来るはず。

「こうして、物理学が記述する自然の客観的な真の姿と、私たちの主観的表象とは、質的にも、存在の身分としても、まったく異質のものとみなされる。」

ここから、世界は「まったく異質」な2つのものから成り立っているというのが「二元論」のニュアンスであることも分かる。よって、全体としては「…に対して、～であるという考え。」や「世界は…と～の全く異質な存在からなるという考え」などとなることが分かる。

⑤ 「物」

Ans. 説明している箇所がたくさんあるので、恣意的な選択にならないよう気をつけたい。

まず 26 行目の「こうして」に着目。その後にまとめが来るはず。

「こうして、物理学が記述する自然の客観的な真の姿と、私たちの主観的表象とは、質的にも、存在の身分としても、まったく異質のものとみなされる。」

この箇所を本文に即して具体的に説明すればよい。

「物」の説明は「物理学が記述する自然の客観的な真の姿」だから、直前までの第一と第二の特徴が使えらるだろう。第一の機械論的自然観の「定められた法則通りに動く (15 行目)」と、第二の原子論的な還元主義の「自然はすべて微小な粒子とそれに外から課される自然法則からできており」がポイントになる。

(1) 法則に従う, (2) 原子, この二点が「物」の世界のエレメントである。

⑥ 「心」

Ans. 「心」の方は、「私たちの主観的表象」に対応する。これを具体的に説明すればよい。

ディスコースマーカーの「つまり」に着目すれば、23 行目の「知覚世界は心ないし脳の中に生じた一種のイメージや表象にすぎない。」「物理学的世界は、…無常の世界である。」が浮かび上がってくる。

前者については、本文がそのままつかえるだろう。

後者については、ディスコースマーカーの「それに対して」に着目したい。25 行目にそのポジティブな説明がある；「知覚正解は…意味や価値のある日常物に満ちている」。ここは知覚世界のポジティブな説明になっているので、「意味や価値」というキーワードは答案に含めたいところ。

7 確認

Ans. 最後に、33 行目の「二元論によれば」というキーワードに着目すれば、直後に的確なまとめが来ていることにも気がつく。「二元論によれば、自然は、何の個性もない粒子が反復的に法則に従っているだけの存在となる」をチェックしよう。これが「物」に関するまとめになっているので、参考になる。

【設問一 解答】

解答 法則に従う原子以下の粒子のみが自然には実在し、一方で人間の心または脳がイメージや表象として知覚世界、自然の意味や価値を生み出すという考え。(69 字) (鉄緑会)

解答

解答

解答

【採点基準】

- (1) 「物」の実体性【2 点】……自然世界に実在するのは＋原子以下の粒子【各 1 点】
- (2) 「心」の実体性【3 点】……心、脳、主観性において＋表象の成立＋自然に対する意味や価値の設定【各 1 点】
- (3) 「二元論」という言葉への対応【1 点】……対立性の設定（……に対して、――）と、答の締めくくりの語（……という考え・立場）

(2)

《設問二》

⑧ 問二のタイプは？

Ans. まずは、傍線部以外に着目しよう。「言わば」に○をつけたか。

「言わば」は直前までの内容を比喩的に語るディスコースマーカーである。よって、傍線部の具体的な説明は、直前までに書かれているというあたりがつけられる。

⑨ 下線部説明問題の定石は？

Ans. (1) 構文（下線部とそろえる）、(2) 分析（何を説明すべきか）、(3) 具体化（説明）。説明問題は、大抵抽象的な言い方になっているので、それを具体化して分かりやすく説明するわけだ。

⑩ 構文

Ans. 理由説明問題なので、「…だから。」とする。また、比喩の説明問題なので、自分の答案に比喩的な言い方が残っていないかチェックしよう。

⑪ 分析

Ans. 「自然賛美の抒情詩を作る詩人は」、「いまや…しなければならなくなった」、「人間の精神の素晴らしさを讃える自己賛美を口に」

⑫ 「自然賛美の抒情詩を作る詩人は」

Ans. 比喩的な言い方なので、詩人にこだわる必要はない。要は、自然美とはどう説明されるのか、ということが分かればよい。

これまででは自然美を語る際、美しいのは自然そのものであった。ところが「今や」どうなったのか。それがこの問題のポイント。

⑬ 「いまや…しなければならなくなった」

Ans. 「いまや」とあるということは、昔はそうではなかった、あることがきっかけになって変わった、ということである。それはこれまでの流れからすれば、当然、近代の物心二元論の登場がそのきっかけであることは分かるだろう。

しかし、内容だけでなく形式的な根拠も押さえて、慎重に判断したい。傍線部直前の文の冒頭の「そこでは」に着目しよう。これの指示対象は、「二元論的な認識論」である。ここから、やはりこれであっていた、という確証が得られる。ここでも、指示代名詞の理解が問われているということにも注意したい。

以上から、本文は問一とは、コインの表裏の関係にあることが分かる。したがって、問一を利用しつつ、物心二元論を簡潔にまとめて答案で使いたい。「…しなければならなくなった」という言い方に逆接や皮肉の匂いを感じ取れると、なおよい。

このように、東大の問題は各問がセリーのようにつながっていることは知っておいてよい。

また、33 行目の「二元論によれば」というキーワードに着目すれば、直後に的確なまとめが来ていることにも気がつくので、こちらも利用できる。「二元論によれば、自然は、何の個性もない粒子が反復的に法則に従っているだけの存在となる。

14 「人間の精神の素晴らしさを讃える自己賛美を口に」

Ans. 「自己賛美」を具体化できるか。自分たちの精神、つまり「人間の精神」のことだ。

15 理由

Ans. 物心二元論の説明を、「人間の精神の賛美」につなげる形でまとめる。

「今や」の具体化ができると、本問の狙いが分かることだろう。つまり、「物心二元論」→「人間精神の賛美」、この→を埋める理由を書かせたいわけだ。一般に理由説明問題は、 $A \rightarrow ?? \rightarrow B$ の「??」を書かせるというパターンが非常に多い。

それでは、物心二元論に従うと、なぜ美が自然ではなく精神にあるということになるのだろうか。

それは、問一を考えれば明らかだろう。物心二元論によれば、物質は法則に従うだけの微粒子以下の存在に過ぎず、美などの価値は人間の主観が与えるということだった。つまり「美」という物は人間の精神が生み出した物なのである。従って、「自然って美しいなあ」という言い方は、実は「そう考えられる俺すげー」という逆説的な事態になっているのである。

【設問二 解答】

解答 二元論的な認識論によれば、意味や価値は自然自体には存在せず、人間の精神が生み出すものであるから、自然美を称えることは人間自身の賛美に他ならないから。(74 字) (矢野)

解答 自然に実在するのは原子以下の微粒子のみだという考えに伴って、自然賛美とは実在しない自然美をイメージした人間の想像力を称賛したことになるから。(70 字) (鉄緑会)

解答

解答

解答

【採点基準】

(1) 背景となる「物心二元論」【1点】……真に実在する「自然」について書いても、意味や価値が人間の創作でしかないという方を書いても構わない。

(2) 自然に賛美される対象など存在しないこと【2点】

(3) 人間が自然に対して、「美」「素晴らしい」ものという価値を付与したこと。【1点】

(4) 価値を付与できる人間の精神が凄いということ【2点】

(3)

《設問三》

16 問三のタイプは？

Ans. 前。

17 構文

Ans. まず、傍線部以外に着目。主語は何か、押さえよう。

次に、「比較できる」の意味を押さえよう。「たとえらる」という意味である。つまり比喩説明である。よって、何と何がたとえられていて、なぜたとえられるのかを具体的に説明できればよい。

たとえられる理由としては、両者の類似性を指摘すればよいだろう。よって、「…という点で、～と似ているから。」などとまとめる。

18 「…に比較できる」

Ans. たとえらる、ということ。比喩解説問題であることに気がつけたか。比喩なので、共通点が理由となる。

19 例

Ans. 夫婦は靴にたとえられる。片方だけでは歩けない。常に右と左セットで歩く。どちらも、二者がそろってはじめて意味がある。片方だけでは意味がない。

20 主語

Ans. 主語は「近代科学の自然に対する知的・実践的態度は」である。これは、直前の「自然を分解して（知的に言えば、分析をして）、材料として他の場所で利用する」で具体化されている。「分析」が知的態度、「利用する」が実践的態度を指す。後は、これらを具体化するだけ。

「分解」「分析」の方は、その類義語の「切り詰める」に着目すれば、34行目の「時間的にも空間的にも極微にまで切り詰められた自然は、場所と歴史としての特殊性を奪われる」がヒントになるだろう。「場所と歴史としての特殊性を奪われる」は一般化すれば、直前の「個性」が欠落することを意味する。よって「分解」「分析」の具体的な意味は、「個性を無視して分解する」という意味であることが分かる。「欠落」が（分解・分析の）デメリットを指していることもヒントになる。

次に、「実践的態度」は「利用すること」を指す。ただ、「利用だけを考える」という強いニュアンスであることは押さえておきたい。

以上から、「自然の個性を無視して分解する」「その利用だけを考える」、この2点が導き出せたか。

実は、少し離れているが、59行目の以下の箇所は、最大のヒントになる。

「自然を分解不可能な粒子と自然法則の観点のみで捉えるならば、自然は利用可能なエネルギー以上のものではないことになる。」

ここも冷静に参考にできるようになるとよい。

最後に、「実践的」という言葉の意味をチェックしておこう。「行為や行動」にかかわるということ。「知的」と対比的に語られることが多い。人間は、「理解し」「行動する」という2つの局面から対比的にとらえられる。

例。「実践理性」など。世界がいかにあるかを理解する純粋理性に対して、どう振る舞うべきかという倫理にかかわる理性を実践理性と呼ぶ。

21 自然をかみ砕いて栄養として摂取することに比較できる

Ans. 「食事」のことを言っていることを、まずは押さえなければならない。そして食事の比喻をうまく説明できるかがポイント。

22 「自然をかみ砕いて」

Ans. 粉々にすりつぶして利用しやすい状態に変形するイメージ。例えば、ビタミンCが取りたい場合、栄養素が得られれば、リンゴでもミカンでもなんでもよい。原形をとどめておく必要はない。元の対象の個性はどうでもよい。ただ栄養がえられればそれでよいのだ。そういう態度を指している。

23 「栄養として摂取する」

Ans. 「食事＝栄養素の獲得」と捉えること。食事とはもっと全体的なことである。味わう、団らんをするなど、たくさんの要素が含まれるが、それを栄養摂取という観点のみから考えること。食事を栄養摂取という観点のみから考える還元主義的な考え方のこと。

そうすると、何を食べるかはどうでもよく、とにかく生命維持に必要な栄養素だけを摂取すればよいことになる。極端な話、栄養素が得られれば、錠剤の摂取のみということでもよいわけだ。このように、食事から文化的社会的美的要素を捨象し、生命維持という功利的な観点からのみ考えること。それは、自然を利用できればそれでよいという観点から、どんどん分解を進めていった事とパラレルである。

【設問三 解答】

解答 近代科学が自然界の個性を無視し、分解して粒子を取り出し利用する姿勢は、食事をその一局面に過ぎない栄養素の獲得として捉えることに似ているから。(70字) (鉄緑会)

解答

解答

解答

【採点基準】

- (1) 近代科学の姿勢【3点】……個性の無視＋分解して粒子にする＋その利用【各1点】
- (2) 栄養の摂取【2点】……食事というあり方、その個性・全体的あり方の一局面性＋食物の粒子性（栄養素）

【各1点】

- (3) 「比較できる」【1点】……～と同じである。似ている。

(4)

《設問四》

24 問四のタイプは？

Ans. 傍線部以外に着目する。「これらの」とあるので、これを具体化するだけ。よって、該当箇所は「前」にあることが分かる。

25 構文

Ans. 「…こと。」

26 分析

Ans. 「従来の原子論的な個人概念」「から生じる」「(これらの) 政治的・社会的問題」

27 「から生じる」

Ans. ある考え方からある結果が生じること。「…の結果、～となること」「…のため(…によって)、～となること」など。答案の大枠を気をつけたい。

28 「従来の原子論的な個人概念」

Ans. 43 行目の「つまり」に着目。「つまり、人間個人から特殊な諸特徴を取り除き、原子のように単独の存在として遊離させ、規則や法に従ってはたらく存在として捉えるのだ。」を要約すればよい。「のだ」という「のである文」に着目。

ただしこの箇所の「特殊な諸特徴を取り除き」は、これだけでは抽象的なので、具体化したい。「諸特徴」の繰り返しに着目すれば、49 行目の「その人のもつ具体的な特徴、歴史的背景、文化的・社会的アイデンティティ、特殊な諸条件を排除する」が、そのまま使える。また、直前の「地域性や歴史性から自由な主体」を利用して具体化してもよい。

29 「(これらの) 政治的・社会的問題」

Ans. 「これら」が指すのは直前で挙げられている諸問題であるが、これは傍線部直前の文で一般化されている。

「個々人の個性と歴史性を無視した考え方は、ある人が自分の潜在能力を十全に発揮して生きるために要する個別のニーズに^{こた}えられない。」

つまり、「個性の無視→個別のニーズに^{こた}えられない」という論理。後は、「従来の原子論的な個人概念」が「個性の無視」につながるように、答案をまとめ、微調整するだけ。マイノリティの排除につながっているという、全体のトーンを意識したい。模範解答では「排除」の中身を具体化しているが、「排除」をそのままつかっても、全体として答案が自立すればそれでよい。

また、「個々人の個性と歴史性を無視した考え方」は「従来の原子論的な個人概念」とほぼ同義であることに注意したい。

【設問四 解答】

解答 地域的歴史的特徴を捨象し、規則や法に従う個人という近代の人間観ゆえに、各人の個性は無視され、人それぞれの要求に社会が対応できないこと。(67 字) (鉄緑会)

解答

解答

解答

【採点基準】

- (1) 「従来の原子論的な個人概念」【2 点】……以下の二点
 - ・「それまでの地域性や歴史性から自由な主体」「人間個人から特殊な諸特徴を取り除き」【1 点】
 - ・「規則や法に従ってはたらく存在」【1 点】
- (2) 「から生じる」【1 点】……因果関係の設定
- (3) 「政治的・社会的問題」【5 点】……以下の二点
 - ・個性の喪失・無視（「アイデンティティを失った根無し草であり、誰とも区別のつかない個性を喪失しがちな存在」）【2 点】
 - ・人それぞれの要求に社会が対応できない（「個々人の個性と歴史性を無視した考え方は、……個別のニーズに応えられない。」）【3 点】
 - ・部分点 1 点……標準的人間像の規定、マイノリティの排除

(5)

《設問五》

30 問五のタイプは？

Ans. 前。

31 分析

Ans. 「自然破壊によって人間も動物も住めなくなった場所は」「そのような考え方が」「もたらした」「悲劇的帰結である」

32 「もたらした」

Ans. 何が原因で何が引き起こされたのか、何の結果何が起こったのかが分かるように説明する。理由説明問題。

33 「そのような考え方」

Ans. これを具体化するのが本問の主眼。指示対象は「環境問題の根底にある近代の二元論的自然観（かつ二元論的人間観・社会観）の弊害」である。つまり「そのような考え方」とは、(1)「二元論的自然観」と(2)「二元論的人間観・社会観」を指す。

56行目の「近代科学が自然環境にもたらす問題と、これらの従来の原子論的な個人概念から生じる政治的・社会的問題とは同型であり、並行していることを確認してほしい。」に着目したい。

ここが分かれば、(1)と(2)をそれぞれ具体化する。そしてその作業は、これまでの問を踏まえればできる（(1)は問一、(2)は問四）。ということで、この問題を解くことが本文全体に要約になっていることにも気がつくはずだ。

さて、環境破壊を直接引き起こしたのは(1)ではないか、という疑問が生じよう。その理解で問題ないが、傍線部の「そのような」が一応(1)と(2)の両方を指しているので、模範解答では両方を含めた答案になっている。

34 「自然破壊によって人間も動物も住めなくなった場所」

Ans. 比喩的な言い方なので、説明したいところ。要は「破壊された生態系」のことを指していることが分かったか。

実はここは、本文冒頭の最重要箇所（9行目）「それだけではなく、近代科学の自然観そのものの中に、生態系の維持と保護に相反する発想が含まれていたと考えられるのである。」の結論が問五であることが見抜けていれば楽勝。近代科学の自然観と生態系の概念が具体的にどのように相反するのかを書けば答えとなる。よって、(1)近代科学の自然観（問一、問二）、(2)生態系の概念（最終段落）、これらをそれぞれ説明した上で、両者が矛盾する結果、環境破壊を引き起こしたという流れにすればよい。

35 「生態系」の説明

Ans. 「生態系」というものが、この文章ではどのような物として捉えられているのか、その性質を、傍線部にある「そのような考え方」と対立するものとして、対比的に説明しておく必要がある。なぜか。

「そのような考え方」→「生態系の破壊」、この→がつながるためには、そのような考え方と生態系の本来のあり方が、そもそも相容れないということを説明しなければならないので、「そのような考え方」だけを説明するのは不十分。「生態系とは本来…なのに、そのような考え方がそうした性質を破壊した」という理由のつながりを丁寧に説明しよう。飛躍のないように。

そこで、67行目の「これが」という指示代名詞と「のである」文に着目する。「これが、環境問題の根底にある近代の二元論的自然観（かつ二元論的人間観・社会観）の弊害なのである。」

「これ」が指すのは「自然に対してつねに分解的・分析的な態度をとれば、生態系の個性、歴史性、場所性は見逃されてしまうだろう。」である。この文は、「そのような考え方」と「生態系のあり方」の対比を、最もうまく説明してる。あとは、ここを要約するだけ。「生態系の全体論的な性格」が、「近代科学の分析的な性格」と鋭く対立する。「個性、歴史性、場所性（の喪失）」が、「近代科学の人間観・社会観の個性の捨象」は矛盾の関係にある。「分析」vs「総合、全体」、「原子論」vs「個性」、といった対比を押さえる。

以上から、ここは「全体論的で個性を持つ生態系が破壊された」くらいにまとめたい。

36 「悲劇的帰結である」

Ans. 最悪の形であるということ。答案全体が、弊害というニュアンスを醸し出しているか。

【設問五 解答】

解答

解答

解答

解答

【採点基準】

(1) 「そのような考え方」の第一、二元論的人間観・社会観【2点】……個性の捨象＋原子のように単独の存在として設定する【各1点】

(2) 「そのような考え方」の第二、近代の二元論的自然観【5点】……2点個性の無さ＋2点それ以上には分解不可能な粒子が1点自然法則に則っているだけ。

(3) 「生態系」の姿【4点】……各々が個性的＋全体論的存在【各2点】

(4) 「自然破壊によって人間も動物も住めなくなった場所」【3点】

・破壊された「自然」「場所」とは「生態系」であるという位置づけ【2点】

・悲劇的結末、「人間も動物も住めなくなった」に対応する言い換え……「生物の住める自然ではない」ℓ 61

【1点】

参考解答

問一 法則に従う原子以下の粒子のみが自然には実在し、一方で人間の心または脳がイメージや表象として知覚世界、自然の意味や価値を生み出すという考え。

問二 自然に実在するのは原子以下の微粒子のみだという考えに伴って、自然賛美とは実在しない自然美をイメージした人間の想像力を称賛したことになるから。

問三 近代科学が自然界の個性を無視し、分解して粒子を取り出し利用する姿勢は、食事をその一局面に過ぎない栄養素の獲得として捉えることに似ているから。

問四 地域的歴史的特徴を捨象し、規則や法に従う個人という近代の人間観ゆえに、各人の個性は無視され、人それぞれの要求に社会が対応できないこと。

問五 個性を捨象し原子論的に個人を捉える近代社会の態度に対応し、個性がない粒子と法則のみで自然は構成されるという近代科学の見方が成立した。しかしその結果、全体論的存在であり各々が個性を持つ、様々な生物が住まう生態系は破壊されるに至ったということ。(120 字)

問六 a 枯渇・涸渇 b 効率 c 秩序 d 浸透・滲透 e 交換